

将棋駒の「歩」のように 一歩一歩しっかりと歩み続ける

大竹さんの自宅兼工房には、小学校の子どもたちがよく見学に来て来る。その際、大竹さんが必ず子どもたちに言うことは、「歩は二歩一歩ゆっくりとしか前に行けません。でも敵陣に行くとき『金』になって出世します。何でもそうですが、直ぐに一人前にはなれません。しっかりと着実に一歩ずつ前に歩み続け、夢に向かって努力し、成長していったほしい」と自らも日々の仕事を積み重ね、一歩一歩、駒師としての階段を上ってきた大竹さん。駒の中でも歩が一番好きだという。

「戦後、疎開してきたときに親戚や近所の人から本当に親切にしてもらい、助けてもらったおかげで駒作りを再開できました。おやしは常々『何かの時には恩返ししろ』と仰っていました。今回、竜王戦が三条市で開催されることとなりましたが、今こそ三

条に恩返ししなければならぬと思っています」。今回の竜王戦のために最高峰の竹風駒一式を提供するという。

しかし、竹風駒の歴史は、幕を閉じようとしている。大竹さんがやめ、弟の健司さんがやめるところで途絶えてしまう。後継者がいない現状が突きつけられる。これから先、弟子を取り、後を継ぐにしてもそれぞれの製造工程ごとに技術を伝承していかなければならず、相当の時間と労力が必要となる。

三条市でも、何とか後継者が生み出されやすい環境をと、事業承継セミナーや地場産業技術継承事業、新規鍛冶人材育成事業など様々な取組を行っている。職人の後継者については、ここだけの問題ではなく三条市全体ひいては全国的にも減少の一途をたどっている。素晴らしい技術と心意気を持ち合

わせた多くの職人が時代とともにいなくなっていくことは少なからず認識されているが、これらの技が継承されていかなければならないことは非常に心苦しく、寂しさを感じずにはいられない。それでも、大竹さんは「今いる若い駒師が、盛り上げて行ってくれればと思います。駒師は三子相伝のようなところもあります。私がやめて、弟がやめたら終わりです。引き継が肝心なので、限界だと感じたなら、すぐさまやめようと思っています」と心の内を語ってくれた。

ここ職人のまち三条で、半世紀にわたって駒作りを情熱を傾けてきた大竹さん。木地へのこだわりと全神経を筆先に集中させた細かな漆の技、そして駒師の熱い思いが数々の銘駒を生み出してきた。さらに、新たな42枚の駒との出会いを求めて、大竹さんの駒作りはこれからも続いていく。



自宅兼工房の前にて 左から栄子さん(妻)、大竹さん、健司さん(弟)